

スリランカにおけるサイクロン被害に対する 国際緊急援助隊・医療チームが帰国 ～現地支援の様子や診療実績などを報告～

独立行政法人国際協力機構（JICA）は、スリランカ民主社会主義共和国（以下、スリランカ）におけるサイクロン被害を受け、外務大臣の派遣命令の元、国際緊急援助隊（JDR）医療チームを現地に派遣しました。12月3日（水）に羽田空港を出発した医療チームは、大きな被害を受けたスリランカ中西部の町チラウでの12日間の支援活動を終え、12月16日（火）、派遣されていた31名全員が無事に帰国しました。

成田空港にて執り行われた解団式において、岩瀬喜一郎団長（外務省）は「朝には深刻な表情で列に並んでいた患者の方々が、診療後には笑顔で帰っていく姿が非常に印象的でした。地元チラウでの日本理解の促進、日本とスリランカの関係の深化に、確実に貢献できたと考えています」と述べました。現地では12月4日から12月14日までに1,255件の診療が行われました。診療テント内は40度を超えることもあり、猛暑や突然の大雨でテントが浸水するなど厳しい環境下での活動となりました。

今回、サイクロンが抜けきらない早期の段階で、スリランカ政府から日本政府に派遣要請がありました。これに対して、JICA国際緊急援助隊事務局の飯村学事務局長は「過去を振り返ると、国際緊急援助隊はこれまでに3回スリランカに展開しています。スリランカも、東日本大震災では日本に支援の手を差し伸べてくれましたし、2010年1月のハイチ地震では現地で協力しあうなど、人道支援でも深い絆があると思いました。今回後続チームを派遣する選択肢もありましたが、現地の医療機能が回復してきていることから、国際緊急援助隊による支援はいったんここまでとする判断となりました」と述べました。

解団式に出席したピヴィトゥル・ジャナック・クマーラシンハ駐日スリランカ民主社会主義共和国特命全権大使は、「近年の私たちの歴史において最も困難な時期に示してくださいましたゆるぎないご支援に対し、心から感謝申し上げます。国際緊急援助隊の活動は、幾多の災害を乗り越えてきた経験を共有し相互の助け合いで結ばれた二つの島国、日本とスリランカの深い友情と信頼の証です。スリランカ国民は隊員の皆さんとの優しさとプロ意識を長く記憶に留めることでしょう」と語りました。

PRESS RELEASE



解団式に臨む国際緊急援助隊



現地での診療の様子

PRESS RELEASE



独立行政法人国際協力機構

広報部報道課

2025年12月17日



現地での診療の様子

■ 独立行政法人国際協力機構（JICA）について

JICAは、開発途上国が直面する課題を解決するため、技術協力、有償資金協力、無償資金協力など日本の政府開発援助（ODA）を一元的に担う二国間援助の実施機関で、150以上の国と地域で事業を展開しています。国際社会の課題は日本とも密接に関係しています。国内外のパートナーと協力してそれらの解決に取り組み、世界の平和と繁栄、日本社会の更なる発展に貢献します。詳しくは <https://www.jica.go.jp/index.html> をご覧ください

■ 国際緊急援助隊（JDR）について

国際緊急援助隊（JDR）は、海外で大規模な災害が発生した際、緊急支援を行うため日本政府の決定に基づき派遣されるチームで、JICAはその事務局を担っています。災害時の医療ケアを担う医療チーム、捜索救助を担う救助チーム、感染症の流行に対応する感染症対策チームのほか、災害地のニーズに合わせて組織される専門家チーム、輸送や支援活動を行う自衛隊部隊などの派遣類型があり、頻発・激甚化する災害に迅速に対応しています。救助チームは2010年、国連の国際捜索救助諮問グループ（INSARAG）により、最も高度な救助活動ができる「ヘビー級」の国際認証を、また医療チームは2016年、世界保健機関（WHO）により、専門的・組織的な緊急医療が可能なチームとして「EMTタイプ2」の国際認証を受けています。公式X(旧Twitter): https://x.com/jdr_secretariat